ラやクヌギの薪炭林のように，ゴツゴツした根株から枝がたくさん出ているという形だろう (Fig. 1-a)。株をふやすには，採漆のために枝を伐採した残りの根株を，鍬やナイフで分割して，いわば株分けを行なう (Fig. 1-d)。この分け方は日本でウルシをふやす時行なわれる根分けと似ているようだ。

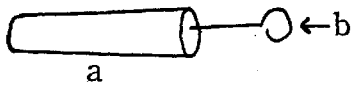

Fig. 2. Jhyam. a. 木製の柄. b. 刃部. (西岡による)

漆の採集は 9～10 月に行なわれる。葉が黄変した頃，株から出た枝を基部から切りとる。枝の太さは送られたサンプルでは直径 3.5 cm, 6～7 年生のものである。枝の全長は 2～2.5 m あり，葉を払ってからこれを 2～3 本に切り分ける。これに jhyam (Fig. 2) という特殊な形をした刃物で 13～16 cm おきに幅 1～2 cm の環状の傷をつける。細い枝に対しては単になた目をかるく入れておく。そしてしみ出る漆を指先でこすりとり，ガラスまたは竹の容器に集め，表面に水をはって保存する。

以上は西ブータンでの事情であるが，中央ブータン，東ブータンではウルシ樹は高木形に仕立てられ，繁殖は果実によっている。また漆の採集は葉および果実から行なわれている。この地域ではウルシ樹の栽培は少なく，採集量もわずかであるという。葉や果実からどのようにして採漆するのか，また木を生かしたままで幹に傷をつけて採漆するやり方があるか否かなどについては記されていない。葉から採漆するということは私には予想外であるが，西岡氏の送られた漆のサンプルの中に葉から採集したとされるものがあるし，現地の人も葉からの漆の方が，幹より採った漆より質がおちるとして区別しているそうである。

ブータンにおけるウルシの栽培は小規模であり，専問の木地屋の家でも10～20株というところである。先に書いたように採漆に6～7年生のものを利用するとすれば，これではとても年間の使用量をまかない切れないと考えられるが，何か他から供給されるのであろうか。ブータンにおいては漆器は広く一般に行きわたっており，誰でも漆塗りの椀をふところに持歩いていて，飲食の際これをとり出して用いるということである。興味深い報告をもたらされた西岡氏に敬意を表する。また資料を提供された海外技術協力事業団に感謝する。標本は東大植物学教室に保存する。　(東京大学理学部植物学教室)

正　誤 (**Errata**)

頁 (page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
46	27	May	March
48	28	っている	つけている
〃	29	けによって	によって
〃	〃	クルマグラ	クルマムグラ